
第2章 二話 荒野の絆

フェニックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第2章 二話 荒野の絆

【Nコード】

N9950X

【作者名】

フェニックス

【あらすじ】

その星の西の果てにはウエストホースと言われた荒野があった。ならず者が集まり保安所の連中は手を妬いていた。

任務開始（前書き）

レオ・バレッタは二丁拳銃を持つ孤高の保安官だった。ある日、酒場で賞金首ボスコを捕らえた。

次の日、就任した新しい保安官、投げ縄と格闘の使い手ピートに出会う。帰りがけレオと虎のチャंकは盗賊団に襲われ、ボスコを釈放しろと迫られる。ギリギリの所で魔法使いのクノイチ、剣 美里に助けられる。

世界各地で暴動を起こしている仮面邪教僧と繋がっている盗賊団とは何者なのか？

数多の謎を抱えながら彼らの任務は始まった。

任務開始

次の日は雨だった。

ため息をつくレオ・バレッタ。

「ハアー。雨か。雨の日は照準が定まらないんだよなー。初日からコレか?」「おはようございます。先輩。雨ですね」「まあアタイは構わないんだけどね。アンタラは乗り気じゃないんだろ?」「できれば避けたいな。どうだ?ピート」「そうしましょうよ。ミサトさん」「マアね。アタイ一人でも構わないんだがね。少し出かけて来ようかね。アンタラはここに居るんだろ?」「アア。無茶はするなよ。ミサト」「知ってるかい?レオ・バレッタ。人はね多少なりともリスクを背負ってんだ。無茶はするさ」

雨の中、剣 美里は外に出た。

「凄いですね。あの人は。任務の為に自分を犠牲にしている。僕はそう分析しました」「かもな。それがアイツの仕事なんだろ?クノイチなんてそんなもんさ」「レオさんは?」「俺か?無事に帰ってこれりゃそれで良い。金より命だ。賞金首なら腐るほどいるしな」「もっともな意見ですね。僕は先輩方が無事ならそれで良い。縄使

いなんてそんなもんですよ」「……………悲しい性だな。俺に気を使わなくて良い。好きにやれ」「アノ……………レオさん。今までチームを組んだ事は……………」「聞くな！ピート。二度と聞くな！」「……………すいません……………」「ピートはビックリして謝った。

ミサトは情報収集で酒場に行った。

掲示板を見ながら腰に手を当てる。

「相変わらず賞金首が多いな。この中で例の盗賊団と関係があるのは……………」「オイねーちゃん。盗賊団を探してるのかい？」酒場のマスターが話しかけた。「アア。そうさ。マスター。何か知らないかねー？」「知ってるっちゃー知ってるがね。普通に近づいてもアブクになるだけだよ。やるなら潜入だね。ねーちゃん変装は？」「アタシャー、クノイチだよ。変装位お手のもんさ」「なら、ここに行ってみな。今、地図出すから、待ってな。オラーな、酒場のマスター兼情報屋なんだ。情報じゃ食えねえから酒場に居るだけだな」「ありがとよ。手間賃は保安所に請求してくれ」「要らねえよ。出世払いだ。アンタも……………あれだ。女の出世は結婚だからな。はえーとこ足洗えよ」「余計なお世話だよ。情報屋」ミサトはニコツと笑った。「アイヨ。ここだ。気をつけろよ。お嬢さん」「アタイには、似合わない言い方だね。お嬢さんなんて」ミサトは一枚の紙を受け取り、酒場を後にした。

行きがけにレオとピートに会いに行く。

「今、帰ったよ」「どうだ？何か掴めたか」「アア。アンタラに頼みたい事がある。明日、ここへ行きたいんだ」「盗賊団のアジトか？でかしたぞ。ミサト」「アタイが潜る。ただアンタラはその手前でいざこざを起こして欲しいんだ。で、連中がアタイを保護する。中の情報はアタイが流すから」「つまり……ミサトさんが囷に？大丈夫？」ピートはレオを見た。「確かに。リスクが高い。中の様子も解らない状況だ。戦力も。昨日の連中が全てとはい切り切れんな」「……連中を炙り出す作戦は？で、手薄になった所をミサトさんに任せる。どうです？レオさん」「……いずれにしても衝突は避けられないか。ピートの案が無難だな」

「オウ。暇か？お前たち。昨日の盗賊団が、早速動いたぞ。ボスコの身柄を明日迄に渡せだ」とよ」ボスが部屋に入って来た。「やりましょう。ボス。奴の釈放を」「なんだと！」「まあまあ。俺達に考えがありますから。無駄に手渡す訳にはいきませんから」「……なんだ？考えて」「良いですか？ボスコは危険な目に逢ってでも取り戻したい。それには何か理由があるはず。奴が吐かないなら、乗るまでです」「……わかった。護衛は付けてやるよ。上がうるさくてな。引き渡し場所は何処が良い？」「連中のアジトの近く。」

かつ見渡せる場所。俺とピートがボスコを引き連れて行く。ミサトは隙を見て変装して潜入する。どうだ?」「さすが先輩。異論はありません」「アタイもだよ」「ミサト。生きて帰って来い。任務は以上だ」「そうです。本編は帰ってからですから」「ミサト君。済まん。就任早々、無茶をさせて……………」「フン。わかったよ。連中の戦力やら、必要な情報を盗んだらずらかるさ」

続く

荒野の絆 その2

牢屋に捕らわれた男。ボスコ。明日彼を連行する。

「オイ、囚人！釈放だ！出ろ！」「意外と早かったな。で、誰なんだ？俺を釈放させたのは？」「盗賊団だ。知ってるだろ？」「……：イイヤ。名前は？」「スモーキーガンナーとか言ってたな。知ってるだろ？」「……スモーキー？……知らんなー。聞いた事もねーや」「惚けた奴だ。明日会うんだろ？」

次の日の話しだった。

「さて、俺は知ってるな。こいつはピート。お前を引き渡しに行く。ついてこい」「……あのよー。昨日、警備に聞いたんだが。俺を引き取る奴だが……知らんのだ」「知らない？貴方は組織の人間では？」ピートがボスコに聞いた。「イイヤ。単独で行動する、盗賊だが。大体にして俺ら盗賊は群れるのが嫌いなんだ。盗賊団なんて盗賊の端くれにも満たない野郎共だぜ」「レオさん。なら、何故彼を釈放しろと？」「ピート。盗賊には2つのタイプがいる。ボスコの様に孤高の盗賊もいるが、そうゆう輩を利用したい奴等もいる。裏金が動くケースもある」「なるほど。今回はそのモデルケースですね」「こいつが嘘についてなければな」

ピートはボスコの顔を見た。

「さて、時間にはちと早かったかな？ どうだ？ ボスコ。少し休もうか？」 「なあ、レオ。連中の狙いは本当に俺か？ 随分と警備を付けているみたいだが。手薄になった場所は無いのか？」 「とにかく、アンタを指名してるんだ。今の所はな」 「……………彼らの狙いが他にあるとしたら……………」 「ピート。余計な事は考えるな。今はボスコの護衛に集中するんだ」

林の奥から馬に乗ったフードの男がゆっくりと走って来た。

「随分と早いですね。保安所の方々は」 「アンタが盗賊団か？」 「スモークーガンナー。貴方を保釈する組織の人間ですよ。ボスコさん。さあ渡して貰いましょうか？」 「レオ・バレッタは隠れてついてきた警備をチラッと見る。伸ばせて合図を送る。」「ホウ。アンタがスモークーガンナーか。覚えておこう。ボスコをどうするつもりだ？ こっちも報告する義務があつてな」 「スカウトですよ。レオさん。この前はすいませんでしたね。うちの若い衆がだらしない真似を」 「スカウトね。それで、ズバリ聞くが貴様らの狙いはなんだ？」 「いいでしょう。教えますよ。この大陸の支配です。絶対的な権力、金そんな類いですかね」

続く

荒野の絆 その3

黒いフードを被り背中に二本のライフルを背負った男。葉巻をくわえたガタイの良いその男がスモークーガンナーだった。顔はフードでよく見えない。

「なかなかの腕前の様だな。その図体が物語ってるぜ」レオ・バレツタはその出で立ちに彼の腕を感じた。

「そうですね。その体形では目立ちますよね」ピートはボスコを放さなかった。「随分な警備だな。ザット30か？宜しい。私の腕前を披露してさしあげよう。特別サービスだ」フードを捲り、葉巻を投げ飛ばす。葉巻が宙に舞うのを見上げながら、背中に背負ったライフルに手をかける。

「危ない！ピート！ボスコ！伏せろ！」レオは、横に飛び、地面を転がりながら二人の上に覆い被さる。

ダウン！ダウン！ダウン！

耳を破壊するような激しい銃声が辺りを包む。暫くの静寂の後、ダダダッと言警備が倒れる。

「クッククック。急所は外しておいた。サア、早くボスコを引き渡すんだ。早く手当てしないと連中の命が無いぞ」 「……………わかった！ピート。手錠を外せ！ボスコを釈放するんだ。早く！」 「わかりました。サアどうぞ。スモーキーガンナーさん」

「レオ・バレッタ。この前の借りは返したぞ。次、ふざけた真似を試してみろ。次はオマエだ！」

スモーキーガンナーはボスコをアジトへ連れ帰った。

「レオさん。大丈夫ですか？お怪我は？」 「……………完敗だ。あのライフルを構えるモーションが見えなかった。チキショー！早打ちなら自信があっただが……………」 「あれは見えなくて当たり前です。真空波ですから。つまりあのライフルは全く火を吹いてない。構えるモーションのみで打ち倒しましたから」 「……………真空波？奴の構えはそんな早いのか？」 「そうです。ザット計算しましたが、僕

らがあの場で勝てた確率はほぼ0パーセント。限りなく0に近い1です。そんな事より、今は護衛の方々の手当てを」「そうだな。ミサトが心配だが、とりあえず帰ったら作戦会議だ」「そうですね。僕は保安所に連絡をします。レオさんは、傷の手当てを」

そんな話しは知らない場所でミサトは連中のアジトに変装して捜査をする準備をしていた。

「さて、どんな格好が良いかね？あまり目立たない格好で潜入となると………お色気かね？」

ミサトは髪を上で束ね、淡い紫のドレスに着替えた。盗聴器を髪の中に隠し、監視カメラを小さなピンクのポーチに忍ばせる。

彼らのアジトは深い谷の底にあった。

ミサトは一人降りていく。

「警備はザット10人か？交替を見計らって、誘うか」

「ちょっとミサトさん。待ちなよ」林の中から声がした。「お前はいつかの………」「そうさ。レオ・バレッタに頼まれて後をつけてきた。奴の相棒、虎のチャンクだ」「で、何の用だい？」「あんたには借があつてな。あの時助けて貰った。俺の目は赤外線ゴーグルになってるのさ。それによるとだな、警備が手薄なのは逆方向だ。つまり、この場所は嚴重なのさ。何かがあるんだろうよ。俺は外から見守るから。あんたの誘導をする。ホラよ。通信機だ。これで連絡を取り合う。どうだ？組まないか？」「ありがたいね。貰つとくよ。これで貸し借りは無いよ。アタイは、借りを作る性じゃ無くてね」「アア。わかつてるよ。あんたはレオ・バレッタの昔の相方に似ている。俺達は昔、チームを組んでいたのさ。奴に会うまではな。今もこの大陸にいるのか知らんが。ショットガンナー。奴が俺達の絆を根こそぎ刈り取った」「よく喋る虎だねえ。アタイは関係無いよ。その相方とは」「ナニ。歳をとって水臭くなっただけだ」「一応、覚えておくけど、今回の任務には関係無いからね。ジャ―行つて来るよ。チャンク」

レオ・バレッタ。すまない。つい昔の話を思い出してしまうな。あの剣 美里に会うと。何故かあの子とマリアを重ねてしまうな。レオ。お前がミサトを頼むと俺に頼んだ理由がやっとわかったぜ。も

う失いたく無いもんな。お前が愛した相方を。

「ナア、虎！応答しろ！今、現場に着いたよ。どこから入れれば良い？」
「ン？アア。すまん。エーツト……………もう少しで交替だ。今、替わりが向かっている。分析すると……………あの高台にいる警備が良い。接触しろ」
「わかった。今行く。後は任せてくれ。中に入ったらまた指示を」
「了解。マリ……………いや、ミサト」

続く

荒野の絆 その4

ミサトはチャンクの誘導で盗賊団のアジトに潜入しようとする。

「帰ってたのかい？ 兄上」 「アア。引き取りに行っただけだからな。ボスコは地下の研究室に送った。何だっけ？ あの子」 「マリアですか？ 順調に対応してますよ。もうすぐ解禁できるはずですがね」 「アア。そう言えば面白い土産を置いてきた。レオ・バレッタ。奴に会ってきたよ。少しだけ遊んで来た」 「懐かしい名前ですね。兄上。マリアの元、相方レオですか？」 「奴は切り札になる。それに奴と一緒にいた、ピート。奴は気づいている。たった一回で俺の真空波を見抜いたらしいな。対策は取れていないが。奴には気を付けろ。もしやり合う事になればな」

ボスコは地下の部屋で監禁されていた。

「ナアあんた。ここで何してるんだ？ やけに薬品やらなんやらが散らばってるが」 「実験的なゲームですよ。人体実験の。駒ですから。貴方は」 「俺が駒？ ハン。面白いジョークだ」 「これを見ても笑えるか？」 奥の扉が開く。 「……………これは……………」 ボスコは腰を抜かした。

ミサトは言われた通りに高台の警備を誘った。淡い紫のドレスを捲し上げ、太股を露にする。

「チヨイとあんた。あんただよ」 「オヨッ。女か？何だ？ねーちゃん」 「遊ばないかい？アタイと」 「オウオウ。なかなかの体つきだな。ねーちゃん。アジトに案内するぜ。ケッケッケッケッ」

チャンクの分析も間違っちゃいないね。こんな軽いとは。まあ手間が省けた。

ミサトと警備は中に入る。「ところでねーちゃん。名前は？」 「失礼な人ね。あんたから名乗りなさいよ」 「俺はヤーク。しがない警備さ」 「私はマリア。宜しくね」 「マリアか？どっかで聞いた名前だな。アア、ショットガンナー様。お疲れさまです」 「ウム。異常は？」 「ございません。何もありません」 「そうか？……………誰だ？隣の女は？」 「ミサトはヤークにくつつき手を握った。『婚約者よ。フィアンセ。正確にはお付き合ってるだけだけどね』 「そうか？幸せそうだな。ヤーク。結構だ」

「何故フィアンセだど？」 「嫌だねー。女を抱くのには理由なんかい
る？ 怪しまれたらまずいでしょう？」 「そうだな。ガッハッハッハ
ッ……………良い女だ」

「待ってろ。シャワーを浴びて来る。お前は？」 「待ってるわ。こ
こで」 「アア、そうか」 「あのさ……………着替えとかない？ こんな
格好じゃ目立つでしょう」 「ランドリーに女性用の警備服があるは
ずだ」 「ここね。ありがとう」 「俺はそのカフェにいるから。着
替えたらいよ」 ミサトは後ろ手に扉越しにナゲキスをした。

「単純な男だね。さて何からあたるかな？」 ミサトは髪型を替え、
変装の魔法を解いた。髪の色を替え、警備服に着替え、チャンクに
連絡を取る。

「聞こえるかい？ 虎」 「アア、通信妨害もない。クリアーだ」 「今
さっき、シヨットガンナーって奴に会ったよ」 「シヨットガンナー
？ 奴には近づくな。位置を確認した。そこから何が見える？」 ミサ

トは少し扉を開けて外の様子を伺う。「長い通路だ。人はいないね」
「よし。そのまま真っ直ぐ進め。何か見つけたら連絡を」
「了解」
「ミサトはヤークの居場所に気を配りながら外に出て通路を歩く。」

続く

荒野の絆 その5

剣 美里は盗賊団のアジトに潜入していた。

長い通路を慎重に通ると行き止まりになっていた。

「ちょっとチャンク。行き止まりだよ。引き返すかい？」 「イヤ。その奥だ。壁に何か仕掛けは無いか？」 「壁に仕掛け？」 ミサトは壁に耳を当てた。「……………確かに。この奥に続く道がある。……………誰か来た」

ヤークはミサトを探しに来た。

「オカシイナァ。マリアさん何処に行ったんだろう。嫌われてはいないだろうな」 ブツブツ言いながらヤークが探しに来た。壁に掛けられた絵画を右に回す。ガガガガーと音を立てて壁が回転する。ガチャーン。半回転した所で壁は止まる。

隠れて見ていたミサトも少し時間をおいて、絵画を右に回す。

中は眩いばかりの光に包まれていた。

「チャंक。この道で正しいかい？」 「アア。大丈夫だ。人が集まっている。何かあるようだ。」

二人の男が向こうから歩いて来た。ミサトは近くのロッカーに身を隠す。

「オイ。何だっけ？今日の集会のテーマ」 「アア。なんでも研究していた人体実験が成功したらしいぜ」 「アア。名だたる盗賊を集めて実験してなんとかってヤツか」 「そうそう。そのなんとかってヤツさ。俺も詳しくは知らんがな。トップガンナー様にショットガンナー様、それにその人体実験のモデルを披露するらしいぜ。うちのトップ2が集まるんだ。コリヤーただ事じゃないぜ。そうとう自信がないと出来ない物だろ。そうゆうのは。とにかく参加しようぜ」

「人体実験？名だたる盗賊達？トップガンナー？ショットガンナー？……………チャंक。何かそっち関係の情報は？」 「……………今、入った連絡だと、レオ達はそのトップガンナーに完敗したらしい。それにショットガンナー？トップ2が集まるってのも、気になる」 「……………チャंक。こうしよう。アタイが集会場に盗聴器を仕掛ける。その集会をやっている最中、手薄になるはずだ。アタイはそれを狙う。どうだい？」 「良い考えだ。ミサト。盗聴器の情報は保安

所に流すようにしておく。俺は保安所からの指示をあんたに伝える。あんたは俺の指示を待てば良い。大丈夫か?」「そうだね。アタイの勘だと相当表に出せない物を抱え込んでみたいだし、全部は不可能だね。ポイントを絞って指示を送るように保安所には伝えてくれ」「了解。今、連絡をする。あまり遠くへ行くなよ」

「こちら、チャंक。ボス。ボス、聞こえますか?」「こちら保安所。チャंक。様子はどうか?」「今さっき、無事に潜入した。これから全員参加の大事な集会があるらしい。この後、盗聴器の情報をそちらに流したい。対応出来ますか?」「結構だ。無理をしないようにな。それからレオとピートもこっちに戻っている。換わるか?」「ボス。集会が始まる前に少し調べて欲しい事があります。レオ達が完敗したトップガンナー。それにショットガンナーについてです」「チャंक!俺だ!レオだ!そっちにショットガンナーもいるのか?俺の相方を殺した奴も?」「アア。しばらく姿を眩ましていたがここにいるみたいだぜ」「まさか……………奴は俺が敵討ちをしたんだぜ!しかも2年も前に。おかしいじゃないか?ねーボス」「……………つまり……………レオ。申し訳無いがお前がトドメを刺しきれなかった……………」「嘘だ!絶対に嘘だ!確かにあの日……………」「まあ落ち着け。……………遺体は揚がらなかった。そうだな?」「……………そうですね……………」「関係を調べておこう。ショットガンナーにトップガンナー。彼らの素性は私が責任を持つ。後は?」「……………人体実験。それに名だたる盗賊達を集めている。そこまです。今、わかる範囲では。ボス。ミサトの身を案じてお願いが有ります。できるだけポイントを絞った指示を送って欲しいと。彼女からの伝言です。私からもお願いします」「ウム。よろしい。君達の安全性に

勝る情報は無い。それだけは約束しよう」「ありがとうございます」「ピートはシャワーから出てきた。」「お先に。レオさん」「アア。俺も浴びて来る」

ガンッ……扉を蹴散らし当たり散らすレオ・バレッタがそこにいた。「ボス。何かあったんですか？ミサトさんですか？今の通信」「何でも無いさ。負けた腹いせだろう？アイツもプライドが高いから。それで雇ってる部分もあるんだがな」「……………そうですか？彼女が無事なら良いんですがね」「……………今の所な。問題は無いさ」

ボスはある新聞記事に目を止めた。

「A級犯罪者、トップガンナー。ウエストホース上陸。弟、B級犯罪者、ショットガンナーの敵討ちか？」

普段、目にも留まらない小さな記事だった。

約半年前の記事だった。

ボスはその記事を隠し、葉巻に火を付け、顎を擦った。

チャンク、ミサト。目を付けたのは良いが無事に戻って来いよ。また戦友を亡くしたらおそろくレオ・バレッタは立ち上がれないだろう。

続く

荒野の絆 その6

剣 美里はレオ・バレッタの元相棒、虎のチャンクの誘導で盗賊団のアジトに潜入していた。集会場に盗聴器を仕掛け、身を潜めるのだった。

辺りがざわつき集会場に盗賊達が集まりはじめる。

サイレンと共に扉が閉まり集会が始まる。ミサトは盗聴器の情報に耳を傾ける。

「本日、君らに集まって貰ったのは他ではない。いよいよ完成したのだ。生命の力を超越した人造人間が。生命の死も、限界も、可能性も、全てを超越した生命体が。これまでの我々の研究の結果、遂にこの大陸に眠る宝珠、ガントレッド オーブを地下神殿で見つけた。我々は神々の託したこのオーブで新種の生命体を開発する事に成功した。これまでも、そしてこれからも、我ら盗賊団は栄光の星のもと、生きなくてはならない。見るが良い。我が盗賊団の最高傑作を！」集会場の床が競り上がり、下から試験管に入った生命体が出てくる。

喚声に湧く盗賊団。

「ここで、新種の生命体の名前を発表する。その名はROUSE。覚醒と言う意味のある、ローズ。これが彼らのコードネームだ。そのローズを仕切る者を紹介しよう。ショットガンナー。彼は別名ローズワン。新種生命体の第1号だ。彼は死の狭間から、オーブの力で蘇った。彼の生還が無ければこの研究は完成しなかった。つまり今の彼は、不老不死なのだ」ショットガンナーが前に出て挨拶をする。

「私がローズ部隊 隊長 ショットガンナーだ。ここにいる皆に告ぐ。今日と言う日を、記念日とする。栄光の元に集まりし同士よ！これが我らの時代の始まりなのだ！時代流れに逆らう逆賊を許すな！恥じる事は無いのだ！正義の面を被った武力介入を許すな！以上だ。解散！」

喚声に湧く盗賊団。

「チャंक。全部聞こえた？」

「なんて事だ。ガントレッド オーブ？死者蘇生？……………ボス！
応答してくれ」 「アア。……………我々の手におえる次元の問題では
無さそうだな。上層部に話しておこう。ミサト君、聞こえるか？上
層部が介入するまでローズの情報を集めるのだ。強制はしない。降
りるなら結構だ。一番の報酬は君達の命だからな。無理はするな。
わかったか？」 「冗談じゃないよ。報酬は貰うまで諦めないのがア
タイの性でね。ローズでもガントレッド オーブでも構わない。た
とえ勝てなくてもやり続けてるうちは負けていない。そうだろう？」
「…………アア。保安官の基本を忘れていたな。すまない。君達の無
事を祈る。また連絡をくれよ。こっちでも資料を集めておこう」 「
…………ボス。レオとピートは無事かい？」 「アア。無事だ」 「なら、
アタイらも無事じゃなきゃな。そうだろう？チャंक。会わせる顔位、
用意してあるだろ？」 「そうだ。ボス。我々もベストを尽くす。た
とえ時間がかかってもだ。だから、戻るまで武力介入はしないでく
れ。上層部も」 「わかった。伝えておこう」 「この通信も盗聴され
てるおそれがある。切るぞ」

「ボス。お願いします。僕達に出動命令を」 「ピート君。君達がい
なくて誰が保安所を守るのかね？万が一彼等が攻めこんでみろ。誰
が保安所を守るのかね？君達保安官は人民を守る使命があるのと同
時に守るべき物がある。違うかね？」 「だから、行かせて下さい。
チャंकさんとミサトさんを守りに」 「ピート。落ち着け。我々に

何ができると言うんだ？彼等のバックアップならここでも出来る。それともお前一人で行ってこいと言うと思うか？俺が」気がつくときレオ・バレッタが後ろで腕を組んでいた。「レオさん。………わかりました」「ありがとう。レオ君。ピート。話のついでだ。昔話に付き合って貰おうかな？レオ・バレッタ。過去に何があったか話して貰おうかな？君とチャンク。それにショットガンナーの話を」「………もう3年位、たちますかね？ボス」

レオはボスの机の新聞記事に目をうつした。

「………天下の英雄、レオ・バレッタ。凶悪犯罪者ショットガンナーを射止める………」確かそんな内容の記事だった。

荒野の絆 完結

次回、報われぬ過去。

ご期待下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9950x/>

第2章 二話 荒野の絆

2011年11月2日15時30分発行